SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ジュディ　虹の彼方に

2019年／イギリス映画
配給：ギャガ／118分

2020（令和2）年3月8日鑑賞　TOHOシネマズ西宮OS

Data

監督：ルパート・グールド
原作：ピーター・キルター舞台『End Of The Rainbow』
出演：レネー・ゼルウィガー／ジェシー・バックリー／フィン・ウィットロック／ルーファス・シーウェル／マイケル・ガンボン／ダーシー・ショー／ロイス・ピアソン／リチャード・コーデリー

みどころ

昨年は『アリー　スター誕生』（18年）のレディ・ガガがアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたが、２０１９年は『オズの魔法使い』（39年）で『虹の彼方に』を歌った大スター・ジュディ・ガーランドを演じたレネー・ゼルウィガーが、予想通り主演女優賞をゲット！もっとも、本作は１９６８年の冬のロンドンにおける晩年の落ちぶれ果てた姿だから、それに注目！

なぜ、あの大スターが薬物依存に？精神不安定に？また、私生活ではなぜ結婚、離婚を繰り返したの？それは、レネー・ゼルウィガーの主演女優賞に相応しい熱演で明らかだから、その姿をじっくりと。

そして、本作ラストのライブならではのステージで起きた奇跡とは？ジュディが「ゲイのアイコン」と呼ばれたことも併せて考えながら、その人生をしっかり検証したい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■主演女優賞は本作のレネー・ゼルウィガーで決まり！■□■

２０１９年の第９２回アカデミー賞では、作品賞、監督賞、脚本賞、国際長篇映画賞の４部門をポン・ジュノ監督の『パラサイト　半地下の家族』（19年）が受賞したことが大きな話題を呼んだ。そのため、トランプ大統領はコロラド州で開いた集会で、詰めかけた支持者を前に、信じられないという面持ちで、「今年のアカデミー賞は、何とひどかったことか」と語りかけた。また、「韓国とは、貿易で十分すぎるほど問題を抱えている。その上、今年最高の映画の賞も渡さなければならないのか？」「今こそハリウッド黄金時代に生み出された古典的な映画を取り戻すときだ」と力説し、「『風と共に去りぬ』を見よう。もう一

度『風と共に去りぬ』を取り戻せないか？『サンセット大通り』はどうだ？」とたたみかけた。しかし、ハッキリ言って、これは如何なもの・・・？もっとも、韓国語のセリフを字幕表示した同作の作品賞の受賞は、確かに今後のアカデミー賞の大きな転機になる可能性はある。

他方、個人賞については、主演男優賞は『ジョーカー』（19 年）のホアキン・フェニックス、助演男優賞は『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（19 年）（『シネマ 45』137 頁）のブラッド・ピット、そして、主演女優賞は本作のレネー・ゼルウィガー、助演女優賞は『マリッジ・ストーリー』（19 年）のローラ・ダーンが、それぞれ本命視されていたところ、予想通りの結果となった。レネー・ゼルウィガーは『ブリジット・ジョーンズの日記』（01 年）でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、その後のシリーズ２作品でも主演した。しかし、『ブリジット・ジョーンズの日記　きれそうなわたしの１２か月』（04 年）の私の採点は星３つ（『シネマ 7』101 頁）だったし、そもそも、レネー・ゼルウィガーはそんなに私の好きな女優ではなかった。また、『コールドマウンテン』（03 年）でレネー・ゼルウィガーはアカデミー賞助演女優賞を受賞したが、同作でも私の目は主演の美人女優、ニコール・キッドマンの方に釘付けになっていた（『シネマ 4』139 頁）。

そんなレネー・ゼルウィガーは１９６９年生まれだから、本作出演時は４７歳。ちょうど、ジュディ・ガーランドが死亡した時と同じ年齢ということもあって、本作のジュディ役は当初からレネー・ゼルヴィガーしか考えられなかったらしい。さあ、そんな女優・レネー・ゼルウィガーは、ほぼ全編出ずっぱりとなる本作で、どんな熱演を？

■□■あれから３０年！1968 年の冬。孤独な中年女の今は？■□■

映画検定３級の資格を持つ私が勉強した時の教科書は『映画検定　公式テキストブック』だが、その７４頁には「スタジオ・システムの精華」の小見出しの中で、MGM（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー）の少女スターとしてもてはやされていたジュディ・ガーランドを紹介している。ジュディが１７歳の時にドロシー役で主演したミュージカル映画『オズの魔法使』は１９３９年公開だから、私はリアルタイムで観ていない。しかし、その主題曲として彼女が歌った『虹の彼方に』は中学時代にラジオで何度も聞き、一部は英語で歌えるほど、大好きな曲になっていた。

本作は、そんな子役時代のジュディ（ダーシー・ショー）と並行して、４７歳になった１９６８年冬の今、まだ幼い娘のローナ（ベラ・ラムジー）と息子のジョーイ（ルーウィン・ロイド）を連れながら巡業ステージで生計を立てているジュディの姿が登場する。しかし、あの大スターのジュディが、なぜ今ドサ回りをしているの？しかも、帰ってきたホテルのフロントで、「料金未払いのため、鍵をお渡しできません」と言われている姿を見ると、かなり金に困っている様子だ。金はないのにプライドだけは高いジュディはフロントマンに悪態をついて出て行き、仕方なく元夫のシド・ラフト（ルーファス・シーウェル）

の家に転がり込んだ。子供たちの親権・養育権を巡って争っているシドは、子供を預かることは喜んで了解したが、さあジュディはこれから真夜中に一人どこへ出かけるの？

いくら３０年前にハリウッドの大スターとして輝いていたとしても、今や化粧も剥げ落ちた惨めな中年女として町をさまよい歩くジュディの姿は、いやはや・・・。とは言っても、まだ４７歳。それなのに１９６８年の冬、ジュディはなぜこんな輝きを失った中年女になってしまったの？

■□■アメリカで賞味期限切れなら、ロンドンがあるさ！■□■

去る２月１３日に槇原敬之が覚せい剤で２度目の摘発を受けたが、プロ野球の清原和博を含めて芸能界・スポーツ界の有名人たちが密かに薬物に頼っている姿は日本でも深刻だ。しかして、アメリカは日本以上の薬物王国・・・？もてはやされていた子役時代のジュディは太る体質だったため、ダイエットを厳命されていたらしい。そのため、一口だけのアイスクリームも、一口だけのハンバーガーも見とがめられていたから、若い女の子にとってそのストレスは強く、それが長年積もり積もってくると・・・？１９６８年の冬、ジュディが前述のような状況になっていたのは、そんな事情によるものらしい。

そんな時、イギリス・ロンドンのナイトクラブ「トーク・オブ・ザ・タウン」から、ジュディにショーの依頼が舞い込んできた。２人の子供をシドの元に残し、一人だけでイギリスに向かうのは身を切るほど辛かったが、今やアメリカではドサ回りの巡業しかできないジュディを、ロンドンでは高ギャラ・好待遇で迎えてくれるというのなら、それを受ける他なし。アメリカで賞味期限切れなら、ロンドンがあるさ！そう結論づけたジュディは、一人ロンドンの空港に降り立ち、支配人のバーナード・デルフォント（マイケル・ガンボン）、世話役のロザリン・ワイルダー（ジェシー・バックリー）の手厚い出迎えを受けることに。ホテルも立派なもの。アメリカでは既に賞味期限切れ（？）のジュディも、ロンドンではまだまだ人気は衰えていないようだ。

しかし、翌日ロザリンがバンドリーダーのバート・ローズ（ロイス・ピアソン）の待つリハーサル用の教会へ連れて行っても、ジュディは「気分じゃない」と言って帰ってしまったからアレレ・・・。さらに、開演当日、定刻間近になってもやって来ないジュディを心配し、ロザリンがメイク係を伴ってホテルへ乗り込むと、何とジュディはプレッシャーからバスルームに閉じこもったままだったから、更にアレレ・・・。

■□■ステージ上の勇姿はさすが！そこにミッキーが！■□■

１０代のジュディに厳しいダイエットを命じ、睡眠時間も体型も薬でコントロールしてきたのは、MGM のトップを務めるルイス・B・メイヤー（リチャード・コーデリー）。『オズの魔法使い』で一躍世界的大スターになったジュディはその後、結婚、離婚を繰り返す中で神経症と薬物依存が顕在化し、『アニーよ銃をとれ』（50 年）のアニー役も降板。つい

にはMGMから解雇されてしまうことに。

その後、『スタア誕生』（54年）で見事に復帰したものの、アカデミー賞主演女優賞を巡る争いで、『喝采』（54年）のグレース・ケリーに敗れた失意のため、再び生活が荒れ、自殺未遂を繰り返した。しかし、『ニュールンベルグ裁判』（61年）で再度銀幕に復帰した後、同年に行ったカーネギー・ホールでのコンサートを収録したライブ・アルバムがグラミー賞の最優秀アルバム賞に選ばれ、ジュディも最優秀女性歌唱賞を受賞したからすごい。しかし、彼女の活躍もそこまで。１９６３年以降は表舞台から姿を消し、１９６８年冬には、本作導入部が描くように借金を抱えてドサ回りを続ける中毒女にまで落ちぶれ果てていたわけだ。

そんなジュディだが、それでも一旦ステージに立ち、歌い始めるとすごい。さすがグラミー賞を受賞した歌手だと実感できるので、そんなジュディのステージでの勇姿はあなた自身の目でしっかりと！そして、そんなジュディの前に突如登場してきたのが、LAで知り合い、互いに好意を抱いていた実業家のミッキー・ディーンズ（フィン・ウィットロック）だ。サプライズ！とばかりにロンドンのホテルまで乗り込んできたミッキーにジュディは大喜び。たちまち意気投合した２人は、あれよあれよという間に結婚まで。ちなみに、本作に登場する２人の子供は最初の夫との子供だが、ミュージカル歌手として有名なライザ・ミネリは、彼女が２番目の夫との間に生んだ女の子だ。生涯５回も結婚した女は珍しいが、さてジュディとミッキーとの結婚生活はうまく続くの？

■□■ジュディはなぜ「ゲイのアイコン」と呼ばれたの？■□■

２０１８年の第９１回アカデミー賞では、主演男優賞を『ボヘミアン・ラプソディ』（18年）（『シネマ43』38頁）のラミ・マレックが受賞し、『アリー　スター誕生』（18年）（『シネマ43』40頁）のレディー・ガガが主演女優賞にノミネートされた。前者は１９７０～８０年代に一世を風靡したバンド“クィーン”に、後者は１９８６年生まれの人気絶頂の女性歌手レディー・ガガに焦点を当てた映画だったが、これら有名歌手に共通するのが同性愛（LGBTQ）の臭い。女性歌手でいえば、レディー・ガガだけでなく、マドンナも今のゲイカルチャーにおける人気アーティストだ。本作のパンフレットにある、よしひろまさみち氏（映画ライター）のEssay「ラストシーンに見るスターの“光”と“影”」によれば、ジュディも「ゲイのアイコン」として有名だったらしい。そして、それは１９６７年のタイム誌の記事でも取り上げられたほど有名な話らしい。

しかして、本作後半に登場してくるのが、ジュディの熱烈なファンで、毎晩「トーク・オブ・ザ・タウン」のステージに来ているダン（アンディ・ナイマン）とスタン（ダニエル・セルケイラ）。宝塚大劇場では熱烈なファンは公演終了後に楽屋口でお目当てのスターを見送りつつ握手するのを楽しみにしているが、そこでスターから食事に誘われることはあり得ない。ところが、本作では楽屋口で待っていたダンとスタンを、ジュディが「もし

よかったら軽く食事でも」と誘ったからビックリ。２人が有頂天になって喜んだのは当然だが、平日の夜中（明け方？）に営業している店が見つからなかったため、結局２人はジュディを自宅に招待し、簡素な食事で接待することに。そこで判明したのが、この２人は熱烈なジュディのファンであると同時に同性愛者だったこと。２人は世間の差別の中でこっそり２人で生き抜いていたが、自分自身が薬物依存の中で世間の冷たい目に耐えてきたジュディは、同性愛者であるこの２人に何の偏見もなく、むしろ「だからこその親密感」を見せつけたから、２人はますます大喜び。そんな２人との間に新しく芽生えた友情は、ジュディを「トーク・オブ・ザ・タウン」のステージで頑張るエネルギーになりそうだったが・・・。

■□■ライブならではの、ステージ上の奇跡に注目！■□■

本作は、１９６８年冬のロンドンにおける一時期のジュディに焦点を当てたもの。前述のとおり、ジュディは１９６３年を最後に表舞台から姿を消していたから、ロンドンの「トーク・オブ・ザ・タウン」の舞台でジュディが歌う姿は広く世に知られたものではない。しかし、初出演の日からジュディはトラブル続きだったから、世話係のロザリンは大変だ。前述したように、ロンドンに渡るまでのジュディの女優および歌手としての活動は華やかだったが、私生活の乱れを含めて薬物依存による精神的弱さは際立っていた。それが、一人暮しを余儀なくされているロンドンで治癒されるはずはないから、一時的にミッキーとの結婚や、ダン、スタンとの出会いによる精神的安らぎを得ても、それが長続きしなかったのは仕方ない。その結果、ジュディは「トーク・オブ・ザ・タウン」のステージでも穴を開けるようになったから、クラブがジュディに代わる新スターを登場させようとしたのも当然。しかして、MGM からクビを切られたのと同じように、ジュディは「トーク・オブ・ザ・タウン」からもクビ宣告が下されたから、万事休すだ。

そして今日、ジュディはステージ上に立つ新スターの歌を聴くべく、一人の客として客席に座ろうとしていたが、何とそこで「最後に一曲だけ私に歌わせて」とおねだりを。それを快く認めてもらったジュディは自分のヒット曲を見事に歌い終えたが、そのまま２曲目としてあの『虹の彼方に』を歌い始めたが、途中で声が出なくなったからアレレ・・・。

１９８０年１０月５日に行われた山口百恵のファイナルコンサートでは、『さよならの向う側』を涙の中で絶唱した後、ステージの中央にマイクを置いたまま去っていく彼女の姿が印象的だった。それに対して、本作ではマイクを持ったまま、ジュディが「やっぱり歌えない・・・」と弱音を吐いたから、これではステージがもたないことは明らかだ。しかし、そこで起きた、ライブならではのステージ上の奇跡とは？それは、会場に座る「あるファン」からの歌声だったが、そんな勇気ある行動を起こしたのは一体ダレ？そして、それに勇気づけられた会場は・・・？そんな、あっと驚く感動的な本作ラストのシークエンスはあなた自身の目でしっかりと！

これなら、このステージの数ヶ月後に４７歳で世を去ったジュディ・ガーランドも、思い残すことなく旅立つことができたことだろう。

２０２０（令和2）年3月１３日記